

資 料

「学校暴力を考える講演会」逐語録

A Literal Record of “Lecture on Violence in School”

加藤 誠之 (高知大学教育学部) ¹

工藤 英士 (剣太の会) ²

工藤 奈美 (剣太の会) ³

KATO Masayuki¹, KUDO Hideshi² and KUDO Nami³

1 *Faculty of Education, Kochi University*

2 *“Kenta no Kai” (Kenta’s Association)*

3 *“Kenta no Kai” (Kenta’s Association)*

ABSTRACT

18th July 2017, we had a lecture titled “Lecture on Violence in School” by KUDO Hideshi (“Kenta no Kai”) and KUDO Nami (“Kenta no Kai”) in Taiheiyo Gakuen High School (a private high school in Kochi City, Kochi Prefecture, Japan). This document is a literal record of their lectures.

I. はじめに

「高知子どもの権利を考える会」（代表者：高知大学教育学部准教授 加藤 誠之）は、2017年7月18日（火）、工藤 英士さん（剣太の会）・工藤 奈美さん（剣太の会）をお招きし、私立太平洋学園高等学校（高知市栄田町1-3-8）で「学校暴力を考える講演会」を開催した。本稿は、講演内容の逐語録である。

なお、本講演会の経費の一部は、平成27年度科学研究費助成事業（基金）基盤研究（C）「中学校で不登校を経験した生徒に対する定時制高校の特性を生かした生徒指導について」（課題番号15K04366）による交付金から拠出されている。

II. 講演者の紹介

大分県竹田市在住の工藤 英士さん・工藤 奈美さん夫妻（以下「工藤夫妻」とする）は、2009（平成21）年8月、大分県立竹田高等学校剣道部主将であった長男の剣太君を、部活動中の熱中症で亡くされた。

工藤夫妻は2010（平成22）年、①同校剣道部顧問教諭及び同部副顧問教諭（以下「顧問教諭」及び「副顧問教諭」とする）¹⁾については「直ちに練習を中止し、医療施設に搬送し、あるいは冷却措置を実施するなどの措置を取らなかった過失」、②剣太君の搬送先であった豊後大野市の設置に係る公立おがた総合病院の担当医については「熱中症又は熱射病に対する適切な医療行為を尽くさなかった過失」があり、剣太君はこれらの過失によって亡くなったとして、剣道部顧問教諭・同部副顧問教諭・大分県・豊後大野市に対して、それぞれ損害賠償を求める訴訟を起こした。第一審（大分地方裁判所）では、剣道部顧問教諭・胴部副顧問教諭及び担当医の過失及び当該過失と剣太君の死亡との相当因果関係が認められ、大分県及び豊後大野市に対する倍償請求が認められた。しかし、剣道部顧問教諭・同部副顧問教諭に対する賠償請求については、国家賠償法第1条第1項の規定²⁾を理由に認められなかった³⁾。

その後、工藤夫妻は2016（平成28）年2月、大分県を相手取り、顧問教諭に対して国家賠償法第1条第2項に定める求償権⁴⁾を行使するよう求める住民訴訟を起こした⁵⁾。大分地裁は同年12月22日、顧問教諭の重過失を認め、大分県に対し、元顧問教諭に求償権を行使して100万円の支払を請求するよう命じる判決を下した。大分県はこの判決を不服として福岡高裁に控訴したが、2017（平成29）年10月2日に棄却され、同月17日に第1審判決が確定した⁶⁾。

III. 講演の逐語録

（1） 工藤英士さんの講演の逐語録

大分県の竹田市からまいりました工藤です。今日はよろしく願いいたします。

今のビデオを見てもらってもわかるように、本当に剣太は、ちょうどそのタペストリーが等身大の大きさで作っております。身長は180センチ、体重が80キロありました。スポーツ全般得意で、スポーツ万能な子でした。

彼が竹田高校で剣道を始めて、2年生だったんですけども、実は1年生の夏にも合宿のときに熱中症で倒れております。これはまたものすごい稽古をして40分間、休憩なしに先生にかかっていくという稽古をさせられて、熱中症で倒れました。このときは点滴を1本打っただけで治りまして、またすぐに、次の日の練習にも参加できるぐらい回復しました。

で、2年生の夏、彼、熱中症で亡くなったんですけども、当時、彼が剣道部のキャプテン。私は剣道部の保護者会長をしておりました。8月の3日の日に剣道三段の昇段試験がありまして、彼は高校2年生で剣道三段を取得して、その後、8月の10日から13日まで夏合宿がありました。

その前の年に合宿で倒れてるんで、私はものすごく心配して合宿にも一緒に参加しておりました。この年は何とか倒れることなく夏合宿が終わったので、私もほっとして、これでもう高校で一番つらい合宿が終わったんだから、もう剣太、大丈夫だと。下に弟がいたんですけども、剣太、こいつは大丈夫だと、もう倒れることはないだろうと、それで安心しておりました。

そして、合宿が終わったのが13日。それから3日間の剣道部は休暇に入ります。その休暇の最中に合同合宿があったので、他校の生徒がインフルエンザを発症しました。そこで竹田高校の剣道部もインフルエンザの子が出るのではないかとということで、4日間のインフルエンザの休暇が入ります。合計1週間、7日間、練習をしておりません。

その間に顧問が出したメニューが、家で素振りをしなさいと。家から外に出てはいけませんよと。家で素振りをするだけです。そして、21日、亡くなる前日の稽古ですが、この日は顧問は参加しておりません。生徒たちだけの練習です。

それで先ほど、弟の風音が言っていましたけど、練習のメニューが足が動かなくなるまでやれというものでした。この当時、スポーツしている方はご存じかと思いますが、長期の休みのあとの練習は徐々に徐々に練習の量を増やしていく。そういうのが一般的なスポーツの指導方法で

すよね。

ところが、彼は、練習を見に来るわけでもなく、ただ、足が動かなくなるまでやれと。そして、剣太とほかの部員が先生のところに今日の練習は終わりましたという報告に行くと、おまえたち、ここまでどうやって来たんか。足が動かなくなるまでやれと言うたやないかと。明日の練習は覚えちゃよよということを顧問が言ったそうです。

それで次の日、8月22日、剣太が亡くなった日ですが、朝、私が子どもを学校まで送って行きました。そのときの剣太の様子は、いつもはちょっと話すんですけども、音楽を聞いて、ただじっとしてました。

そして、先輩からのメールで、剣道部の先輩が、今日会いたいんやけど、どうやろかと、いつ会えるかというメールを打ってきました。それに剣太が返したのが、今、先生がぶちキレちよるけん、今日はわかりませんというメールを返しとります。

それで、練習が9時から始まります。9時からの練習。1時間ほど練習をして、最初は胴までの防具はつけてるんですけども、面をつけない練習、すり足の練習をずっと1時間やります。

1時間練習して休憩に入るんですが、そのとき、子どもたちは、こんな小さなコップ2杯程度しか水分を補給していません。なぜかという、たくさん飲むと体の動きが悪くなると。悪くなったら顧問から怒られるというのが一つ。

もう一つは、まだもう一回ぐらいは休憩があるだろうと。10時から大体12時頃まで練習するんで、2時間ありますんで、もう一回ぐらひ休憩があるだろうということ子どもたちは思っていて、少ししか飲んでませんでした。

夏の合宿のときもやはり9時から練習するんですけども、大体2回の休憩はありました。だから、この日も2回の休憩はあるだろうということを思っておったけど、その日の休憩はありませんでした。

10時から休憩に入って、約25分から30分間休憩して、10時半から練習を再開します。練習を再開して、剣道というスポーツは面とか小手とかつけてるんで、体が露出してるのは、本当、首筋、後ろの少しと足首から下ぐらひなんすね、肌が出るのが。あとは防具つけたり胴着着てるんで、サウナスーツを着てるようなもんなんですよ。

そこで練習が始まって、切り返しをして大きい面打ちをします。その後、打ち込み稽古という練習に入ります。これは10秒から15秒ぐらひの短い間隔なんですけども、息継ぎせずはずうっと動き回りますよ。それを交代交代でやる。そういう練習を始めます。

そういう練習を始めたら、1人の生徒がちょっと気分

を悪くして座り込んだりします。そうすると顧問は何をするかという、頭をたたいて、練習しろと。もう1人の子はまた今度気分が悪くてトイレに吐きに行ったりする。そして帰ってくると木刀でお尻をたたかれる。で、早く練習しなさいと。そういう顧問です。

剣太は先ほど弟が言ってましたように、人よりも多く切り返しから打ち込み稽古からさせられていくんですよ。そして、剣太が打ち込み稽古の途中でもう動けなくなる。何回も転んだりします。

そうすると、気合が入っていない、そうやって顧問から怒られる。構えてるのに元立ちと違う方向を向いて構えたりします。そうすると、今度、生徒が行って向きを変えるんですよ。そしてまたさせる。もうふらふらの状態になってる、剣太がどンドン。

そして、最後のほうは竹刀を構えています。相手も構えてる。剣太もただ構えてるだけなんで、相手が竹刀をちよっと払うんですよ。そうすると竹刀を落としてしまう。落としても気づかないんですよ、剣太は。持っていないのに持ったように構えてる。そうすると顧問が来て、歩いた勢いで来て、前蹴りするんですよ、腰のあたり。お一つこうなる。そうしてふらふらになって倒れる。演技をするなど言いながら蹴るんですよ。

そして倒れて、今度、倒れたから部員たちが行って、もう意識がないんですよ、ほとんどね。部員たちが水をかける。もう面かぶってるけど、面かぶってる上から水をかける。

1杯かけても意識は戻らない。2杯目をかける。2杯目をかけたら、やっとそこで意識は戻ったのか、自分で面をはぎ取る。面をはぎ取ったあと、顧問が立てって言うんですよ。そうすると、ただ、その言葉だけに反応して立ってふらふら歩き回り、もう壁があるのがわかってないんですよ。

そのままふらふら行って、壁にぶち当たって、ここに傷をしてそのまま倒れるんですよ。今度、倒れたら顧問、どうするかといったら、倒れてる剣太の襟首をつかんで引き上げて、胴の上に膝を乗せて、こうする。引き上げて、ここで往復びんた10発程度。演技をするなど。俺は熱中症の患者を何人も見てると。おまえのは、そういうのは熱中症じゃねえ。演技をするなど。

で、副顧問の先生がおりましたけども、彼にも、こいつ演技しよるけん配せんていいと。そういうこと言ってます。

そして、そのときに息子が言ってたように、傷があったもんですから、この傷の血が往復びんたをするたびに吹き飛ばすような勢いで往復びんたをする。そして、そのあと、救急車で病院に運ばれて、もう意識ないですから、気管確保するときに誤って前歯が折れたんですよ。

それは子どもたち知らないやけども、子どもたちが最後に、あとから聞いた話じゃ、そのときの往復びんたのせいで前歯が折れたんじゃないかというぐらい強くたたいた。

今、意識がないときにそんなことしませんよね。肩をたたいて大丈夫ですか、大丈夫ですかいう程度でしょ。

その顧問、違うんですよ。そして、意識のない剣太にどうするかと。病院行くかと尋ねて、やっと救急車を呼ぶ。そういう顧問なんです。

最初に2人の生徒が気分が悪いと言ったときに練習を中止して、水分補給なり休憩なりしていれば、こういうことは起こってないんですよ。

日頃からこの顧問っていうのは暴力的な先生で、うちの次男坊が入学してすぐ剣道部に入って練習を終わったあと、正座して先生の話を聞いている。そのときに、うちの子はちょっと鼻炎か花粉症かあったもんですから、鼻呼吸ができなくて口を空けて聞いてたんですね、こうやって。鼻が詰まってるもんですから。

そうすると、顧問が正座している息子のとこ来て、両手で顔をパーンとする。まじめに聞けと。そういうことをする顧問ですし、あと、長男と次男が残され、練習中にね。面をかぶってないやけど、ただ、この状態で、木刀ってありますね。木刀のつば。木刀を逆に持って木刀のつばで頭を12発ずつたたかれるんです。頭ぼこぼこですよ。そういうことを日常的にする先生。

子どもたちは恐ろしくて何も言えない。言ったらやられるかもしれないから。そういう恐怖、暴力で子どもたちを支配し続ける先生ですよ。

そして、倒れて救急車で近くの病院に運ばれました。そのとき、顧問から最初に電話が私のとこにあったときに言われたのが、剣太が倒れた。今日はそんなにきつい練習してませんと。そして、今から救急車でどここの病院行きますから、お父さん来てくださいというのを聞きました。

でも、聞いた瞬間に、きつい練習をせんで何で子どもが倒れるかと、こいつはうそ言いやなっち。言うたらすぐわかりますよね、誰しも。

そして剣太が病院に行ったんで、私もすぐに病院のほうに行きました。行く前に弟の風音がまだ学校にいたので、弟を迎えに学校に行ったんですよ。そしたら迎えに行ってもなかなか車に乗ってこないんです。風音急げと。兄ちゃんが倒れてこうこうで病院行ったんやから、おまえちょっと急いで来いと言うんやけど、急いで来ない。やっと乗ってきたんです。

そのとき、何でおまえ急がんなのかち怒ったら、両足がつって歩ききらん。これも熱中症の症状の一つなんですよ。兄よりもはるかに軽い練習をしている弟でさえ

熱中症になってる。

だから、この日、熱中症には4人の子どもがなってるんです。熱中症の本なんかを見ますと、40分に1回とか30分に1回とか20分に1回とか休憩を取って水分補給しなさいということはしっかり書いてあるんですね。

この顧問は体育大学を出て保健体育の教師であり、彼が教える教科書には熱中症のことはしっかりと書いてる。

そして、毎年1回、文科省から配布される熱中症に関するものを職員会議で配られて、それを見てる。そして、部活動の顧問だから、熱中症に関する講習会にも参加してる。そういう人間が起こした事件です。

体罰、体罰というけど、これ、体罰じゃない。ただの暴力なんですよ。暴力で支配する教員が起こした事件です。

そして、私も次男を連れて病院のほうに行きました。そして、病院に着いたら、そこで顧問が一番先に言ったのが、先ほどと一緒に。今日はそんなにきつい練習はしてませんと。私にそう言った。

そして、剣太はどこですかと聞いたときに、処置室にいますと言って、処置室に私が入って行って、顧問が後ろからついてきて、病院の先生に顧問が言ったのが、今日はそんなにきつい練習はしてませんと。

そこで、顧問が、今日はきつい練習したんで、この子は熱中症になってると言えば、また病院の対応も変わってたかもしれない。また、病院も機械の故障とかあってしっかりとした検査が受けられなかった、最初。

それで熱中症の処置も少し遅れたんだけど、顧問がしっかりと自分がやったことを報告していれば、もっと早く手当てができたと思います。

そして、私が処置室に入ったとき、剣太の姿、ものすごいもんですよ。処置室で寝てて、目はどこ見てるかわからない。私が行ってもわからない。声をかけてもわからない。

ただ、時折、うおーって言ってベッドから起き上がるんです、ずっと。で、暴れるんです。で、処置ができない。処置ができないから、病院の先生が、お父さんも一緒に押さえてくださいと言って、私も剣太の肩を押さえて処置ができるようにずうっと押さえてました。それでおとなしくなったのが鎮静剤を2本打ちました。2本打って、やっとおとなしくなった。

しかし、そのとき見た感じで、これは無理かなという気持ちは心のどこかでありました。こんなにひどい症状は見たことない。

本当にむごいもんですよ。子どもが亡くなる姿を見るのは。普通の教員であるなら、子どもたちもひどくなる前に、先生、もういいんじゃないかち言えるかもしれない。しかし、こういう暴力的な教員には何も言えない。

最後のほうに剣太が倒れてしまう前に、剣太が練習でよかったら手を挙げると。そうすれば練習が終わるというところがありました。1人の1年生がよかったといって手を挙げたんですよ。そうすると、おまえそれ、どこがよかったんだと問い詰められるんです、先生から。

そうすると、子どもたちは手を挙げることはできなくなるんですよ。俺、頑張るけん、手挙げてなっち言ったけども、もう誰も手を挙げてくれる人、いなくなる。

剣太がもうきつくて、もう無理ですという言葉途中、言いました。そうすると顧問が演技をするな、まだできるやろが。おまえの目標は何だと言って無理やりさせるんです。顧問には逆らうことができない、子どもたちは。休みたくても休むこともできない。顧問の言うがままです。

そういう中で剣太は亡くなっていったんです。私たちは、これを許すことは絶対できない。そこで裁判を始めました。第一審はほとんど勝訴で勝ちました。しかし、唯一、国家賠償法という問題で、私たちはその部分だけ負けました。教員個人の責任を取らせることができなかった。

これが一番悔しかった。私たちはお金じゃない。教員個人の責任を取ってほしかった。教員個人に。そこで福岡高裁、最高裁といったけども、国家賠償法だけは勝つことはできなかった。

そこで、私たちは今度、住民監査請求で求償権で争いました。県が払ったお金を求償しなさい。顧問、副顧問に払わせなさいという裁判を起こしました。それが昨年の12月に第一審の判決が出まして、100万円だけ払いなさいと、顧問に。そういう判決が出ました。あとは保険がまかなってる分、それと県にも責任があるから、県が100万円、顧問が100万円ということで、顧問に100万円払いなさいという判決が出ました。

これは本当、画期的というかなかなか出ない判決で、これは半分勝ったようなもんなんですけども、それも今度、県が今、控訴して、福岡高裁で争っております。

私たちが顧問だけじゃない、副顧問にも責任がある、かなりの。練習していた当時、この顧問を止めきるのは副顧問しかいなかった。唯一の大人ですと。その彼も顧問がすることを黙って見ていて見殺しです。彼には重大な責任があると、私はそう思っております。

その判決が今度、10月の2日に福岡高裁で言い渡されます。私たちは副顧問にも求償する義務があると思っております。

それと、刑事訴追のほうなんですけど、先ほどこちらで話した、最初不起訴が出て、その次に不起訴不当が出ました。それでも一度検察に戻って捜査した結果、2回目不起訴が出ました。

私たちは不起訴不当が出たところで、よっし、今度は起訴してくれるぞと。だって、学校の外で同じことやったら、完全な暴力で捕まりますよ、暴力行為で。それが学校の中だと。校門の中だからということ不起訴っておかしいでしょ。

だから、不起訴不当が出たときに、やった、今度、絶対起訴されるぞという気持ちでございました。そしたらまた不起訴ですよ。このときは、私と家内と3日間、口も利きませんでした。さすがにこのときは落ち込みましたね。

それで、落ち込んでいて、家内のFacebookの友達からメールが入りまして、まだ終わってませんよと、まだ手がありますよと、することはありますということをお教えされました。

で、不服申し立てということができるとですよ。地方検察庁が不起訴を出したら、その上、高等検察庁に不服申し立てができるということを知りました。私も早くせないかなと思いつつ、なかなか民事裁判のほうがありましたのでできなかったんですが、今年の5月に福岡のほうに行って、今、不服申し立てをしとります。これで何とか起訴されることを願っております。

いずれにしても、この学校暴力を考えるということなんですが、暴力によって生まれるものは本当に何も無いと思いますよ。顧問が前任校、その前の高校のときの教え子に、私は電話して、どんな人やったということをお聞きしました。

ある生徒は、練習中に、ここ、面の後ろは何もありませんね。ここを竹刀のつばでたたかれて、頭を切って、練習が終わったあとに病院に行って縫ったとか。それとか、いつもパイプ椅子を投げたりするとか。ある子は手を踏まれて、踏んだのは顧問の教え子ですね。

この教え子は、顧問の推薦で大学推薦決まると。それでも今度、顧問は手足のように教え子を使うんですよ。ほんである子にあいつやれということをおっしゃって、やらして、その子から手を踏まれて、まあ手も踏まれたことがあったと、ですね。

で、大学行って、やっぱり剣道したいから、剣道したら竹刀を落とすんですね。で、おかしいから病院に行って診てもらったら、手の腱が切れたあとがあると言われたと。だから、その子が思うに、あのとき踏まれてたど、それしか思い当ることがないということをおっしゃる。…(間) …

だから、こういう顧問を許しちゃいけないし、ここに学生***来てるみたいだけど、本当に子どもたちを教えるにあたって、恐怖心で支配しても何も生まれない。暴力で練習させて教えるのはとても簡単なんです。それが一番手っ取り早いんですよ、言うことを聞かせる

のに。

お互いのことをわかりあって、ほめながら伸ばしてやるというやり方を、今はする人が多いんですけども、なかなかそれでは間に合わない子もいる。けども、そのほうがのちのちの信頼関係というのは築かれていくんですよ。

暴力というのは手っ取り早いけども、信頼関係は全くないですよ。例えばその人が高校の先生だったとすると、高校が終わればその人とはもう縁が切れるからもういいと思いますよ、子どもたちは。お互いに信頼関係で結ばれてたら、高校卒業しても、先生、お久しぶりです、僕、今、頑張ってます、言いながら話し合えることができますよね。

とりとめのない話になりますけども、こうやってうちの子は亡くなっていきました。しかし私たちは、最初は、この剣太の無念を晴らすためにということで裁判を始めましたし、いろんな活動も全国回ってやってきました。

しかし、今は僕たちの考えもだんだん変わってきて、もううちの息子はもう帰ってこないんですよ、いくら頑張ったって。しかし、私たちみたいな家族を出しちゃいかんと、今からの子どもを死なしちゃならん。学校でこういうことが絶対にあってはいかんという思いで、全国を回りながら、いろんな方と講演活動しております。

また詳しい内容は、うちの家内の方から、このあと話があると思います。どうもありがとうございます。

(2) 工藤 奈美さんの講演の逐語録

皆さん、こんばんは。今日はこの高知にお招きいただきまして、ありがとうございます。加藤先生、ありがとうございます。

こうしてまた四国、私、四国初めてなんですけれども、四国の地で息子のお話ができることが、とてもうれしく思います。

多分あまり認知度もないのではないかって思うんですけども、今日は、今、主人からいろいろ当日のこととか、裁判の経緯などは、お話があったので、ちょっと違う角度からお話をさせていただきたいと思います。

今日はまたお母様方もたくさんいらっしゃるんで、きっと母親の気持ちっていうのは、よくわかっていただけるかなって思います。

やはりちょっと私、今日、今、久しぶりに主人のこういう熱の入った当日の話を聞いて、いつもだったら、淡々と話さなきゃいけないと思うんですけども、ちょっと今日うるうるときてますので、御容赦くださいませ(笑)。

剣太はうちの長男で、初めての子どもです。そして両親、私たちの両親にとっても初孫、とてもとてもかわいがられた子どもだったんですよ。

やっぱり母親って、おなかの中から育て、そして早く生まれておいでって、こっちは楽しいよって言いながら。それが守ることができなかったんですね、私たちは。

そのことが私たち多分一生背負っていくものなんですけれども、子どもを亡くすっていうこと、子どもの葬儀をあげるっていうことは、この世の私は一番の地獄だと思っています。

順番的におじいちゃん、おばあちゃん、両親とか、送っていくっていうのがどれほど幸せかって思います。わが子の葬儀をあげるっていうのは、人間の感覚すらなくしてしまいます。人間ではなくなってしまう。

私はその日から、自分の体に鬼が宿っているって思ってます。それほど過酷であり、悲しいとか、つらいとかいう言葉ではどうも言い表せない感情っていうものが芽生えてきます。

ですから、主人が言ったように、この思いをこれ以上ほかの人にさせてはいけないうって、その思いが強くて、私たちはもう裁判のたびとか、街頭署名でも、おまえら何やってる、ばかじゃねえか、やめろとか、目の前で言われたり、金もらったんやろうがとか、子どもが死んで金もらったんだからいいじゃねえかとか、目の前で言われたりしました。

でも、私たちはこの裁判が終わるまで、賠償金はまだ受け取っていません。主人が言ったようにお金ではないんです。で、この地獄を見たからこそ、私たちが伝えられることがあるんじゃないかって思っています。

まず、この剣太の会という、この会なんですけれども、私たちの支援者の方が作ってくれた会です。剣太が亡くなって、4日後に行われた保護者会があります。そのときに聞きに来ていた剣太より1学年下の子どもさんの保護者の方が、このままにしてはいけないと、こんなおかしい話はない。剣太の会という会を作りませんか。そして全国で訴えていきましょうということで立ち上げてくださった会です。

それから今、剣太の会、33回を数えています。北海道にも行きました。いろんな各地を回って、いろんな活動したりとか、大学の先生をお呼びしているんなお話をさせていただいたりとか、そういう活動もしています。

その中で一番何を重要視しているかという、全国の子どもたちの命を守るっていうことなんですよ。こちらの高知子どもの権利を考える会、学校暴力を考える講演会ってなっていますけども、本当、まさにそういうことなんです。私たち大人が守っていかなければならないことなんですよ。こういう会に呼んでいただいたことが本当に私はうれしいです。

まず、子どもが死ぬということ。一つ下の弟、さっき出ていましたけれども、あの子がすべてを見ていました。

皆さんもきょうだいいらっしゃると思いますけれども、兄が目前で殴られて蹴られて、そして意識をなくしている。そういう状態で、彼は何もできなかった。

これは前回、日本体育大学で講演した際に、ちょうど弟の、風の音って書いて風音っていうんですけど、風音がいたので、3人で講演をさせていただきました。そのときに私たちも初めて聞く言葉なんかたくさんあったんですけども、そのときに言っていました。何で俺、助けられなかったんだって。

怖かったんですよ。顧問が怖かった。主人が言ったように、暴力で押さえつけてたので、怖かったんです。ほかの部員たちも誰も声を上げることができなかったんです。そして、その日体大の講演で言っていたのが、俺が死ねばよかった。彼は、そう言っていました。兄貴じゃなくて俺が死ねばよかったんだって。

そして、彼はお通夜のときに目の前に来た顧問と副顧問に対して、まず、顧問に対して、剣太がどれだけおまえのことびびってたか知っちゃるのかって言いました。そして、殴りかかろうとしました。それを大人たちが2人がかりで押さえました。ここで殴っちゃいけないと。

そして、親戚の者が副顧問に言いました。おまえは何やりよったんか。何で止めなかったんか。副顧問が言いました。止めきれませんでした。親戚の者が3回ぐらい聞きました。何つった？今、何て言った？たら、止めきりませんでした。副顧問でさえ顧問を押さえることが怖くてできなかったんです。

17歳の生徒が目前で殴られ続けている。それを止めることができなかった。もし早く、先生、もういいじゃないですか、もうやめてください、救急車呼びましょう。迅速な対応してくれていたら、たらって言い方しても、もう遅いんですけど、私たちは後悔ばかりです。

唯一の大人も止めることができなかったんです。そんな状態を学校の部活動で作ってること自体がおかしいです。

そして、通夜が終わり、剣太は亡くなったあと、司法解剖に出しましたけども、これも話せば長いいろんな葛藤はあります。私はこれ以上、傷つけたくなかったから。また、体切り刻まれるのかなって思って、主人にすごい抵抗しました。

だけど、警察の方が、剣太くんは何か残してるかもしれないと。だから司法解剖、出してくださいっていうことで、泣く泣く司法解剖出しました。

夕方亡くなって、その日の夜中に警察署に遺体として連れていかれ、警察署の冷蔵庫の中に一晩入れられるんですね。それ、連れていくのもビニールっていうんですか、ファスナーをシャーってやる、よくテレビに出てくるあの中にごろんと入れて、ワゴン車の後ろにごろんと

寝かせて、犯人でもないのに。

そして、途中で、夜中の1時ぐらいでしたけど、会いに来てくれた方に剣太の顔、一目見てもらおうと思ってファスナーを私、開けたんです。そしたら、頭がごろってこっちを向いたときに、口からた一つ血が流れてきましたね。子どものそんな姿見なきゃいけないかった。

そして、体がごろごろなりながら警察署に連れていかれました。そして、次の日、病院で司法解剖が行われると。私たちはいても立ってもいられなくて行きました。会わせてもらえないです。

ただ、警察署から病院へ連れてって、病院の中で行われる処置なので、私たちの目にふれることは一切なかったんですが、ここで行われているという場所がわかったので、私たちはその部屋の外で待っていました。

私、あんまり記憶ないんですよ。普通に生活しながら記憶喪失というか、記憶が抜け落ちていくっていうぐらいの精神状態になっていたもので、断片的にしかその頃のことはよく覚えていませんが、私の母も一緒にいて、ちょっと高い位置にその司法解剖する部屋があったんですが、その前に木が何本か植わってあった。あんたは木に登って、剣太、母さんここにいるから大丈夫よって叫んでた。覚えてないです。母がそう言っていました。

そして、地元の警察署に戻ってきたときに、なかなか引き渡してもらえない。書類がたくさんあるんです。その書類を主人とこなし、早く息子に直面したいんだけど、書類がとにかくたくさんあって、やっと書類書いてしまっ、そしてプレハブの中に入れられてる息子の遺体を見たときに、とにかく早くこのファスナーを開けてあげたかった。

袋に入ってたんで。ファスナーを開けたときに真っ黒い顔してました。首から上だけ。真っ黒かったですよ。

そして、近所の葬儀屋さんが来てくださって、あんたはどんだけひどい目に遭ったんだって。かわいそうになって。一緒に帰ろうって。私は霊柩車の後ろに息子と一緒に乗って、頭を抱えて抱いて帰りました。ごめんなさいね、涙が出てきちゃった。子どもが死ぬってそういうことなんですよ。

そして、葬儀の日に、弟、風音が高校1年生でしたけども、最後に兄に、もう何も心配せんでいいぞ、じゃあなって言って、くるっと後ろを向いて、参列者の方に、今日は剣太のために皆さん、参列して下さり、ありがとうございましたって、きっちり挨拶ができました。

誰が教えたわけでもないんですが、のちに聞いたら、剣太がひいおばあちゃんのお葬式のときに孫代表でお話したときに、そういう挨拶をしていたと。覚えてたんですね。次男は全く泣きませんでした、お葬式のときにね。

そして、お葬式が終わり、火葬場に連れていくときに、とにかく家に剣太が戻ってきたときには、もう腐敗臭がしてました。息子の、わが子の体から腐敗臭がする。

なので、葬儀屋さんが、とにかくありっただけのドライアイスを持ってこい。夏ですからね。8月22日ですから。ドライアイスを持ってこいって言って、敷き詰めました、ドライアイス。で、葬儀が終わったときに、もう火葬場に連れていだけなので、そのドライアイスを全部のけました。

そして、そこから40分ほどかけて火葬場に行って、最後のお別れをするときに、普通だったら顔が見えるこの小窓だけ大体開けるんですけども、葬儀屋さんが、もうあんたたちの好きなようにしなさいって言ってくれたので、この蓋全部開けてくださいと。開けてもらいました。そのときに、顔が例えようがない、深緑、顔が深緑なんです。もう肌色じゃない。深緑になっていて、そして汗のように茶色い汁が吹き出してる。腐っていったんですね。

それをタオルで私はふいて、そして言いました。ごめんなさいね。ケンくん、また母さんのところに生まれてきてねって。これが最期の言葉です。

そして、窯に入れるときに弟が、それまで泣かなかったんだけど、お棺の縁に両手でしがみついて、剣太、剣太って叫びました。そして、離れないんです、お棺から。年齢的に1歳半しか違わない年子だったので双子のように育ちました。いつも一緒に、寝るときも一緒に。2段ベッドの上と下。ご飯も一緒に。学校行くのも一緒に。いつも兄は弟を気にかけて、学校も一緒に行っていて。部活も一緒に。そんな弟が兄と今生の別れです。指先が真っ白になるほどお棺の縁をつかまえていたので、大人がその指を一本一本はずしました。そして、その場に崩れ落ちるように座り込みました。

そして、窯の中に入れて主人がボタンを押す。親がボタンを押さなきゃいけないですよ。そしてゴーツという音とともに息子が焼かれていきました。

弟は遺族の控え室ってあるんですけど、そこにも行かず、窯の前に力なく座ってました。係の方に、すいません、ここにいさせてもらっていいですかって言ったら、どうぞ、いいですよ。そして、いとこたちもいるので、いとこにジュース買ってきてって弟は頼みました。そして、それを開けると、窯の前に供えて、剣太、あちいやるうがって。そうやって別れていったんです。

これを顧問や学校、大分県、どこまでわかってるかなって思います。よく新聞やニュースで、何歳の子が亡くなりました。熱中症により亡くなりましたって簡単に書かれてますけど、その中には大変な悲劇、家では大変なことが起こってるんですよ。

これを私たちは見てきたから、やってきたから、だから起こしちゃいけないって訴えてるんですよ。ほかの人にこんなことが起きてはならないって言ってるんです。こんな悲しい家族は私たちが終わりにしてくださいって言ってるんですよ。

教員いじめやめろとか、まだやってるのか、いいかげんにしろって言うことも言われます。だけど、そんな目先のことじゃないんですよ。私たちが教員の個人責任を今、問うって言う裁判、やってますけれども、なぜこれが必要なのかって言うと、今、制限がないから、これだけのことをやってうちの息子を殺しておいても、何の罪にも問われてないわけです。普通に仕事ができるんです。

もし、これで罰則が課せられたら、感情でこいつって手を挙げて殴ろうとしても、これ以上やって、この子に何かあったら自分の責任だって思ったとき、その振り上げた手を下ろすんじゃないか。これ以上、この子に危害を加えないんじゃないか。そのために私たちは戦っています。

主人が言ったように、どれだけ私たちが頑張っても剣太は帰ってきません。だけど、ここまでやってきた私たちだからできること。それが公務員の個人責任。

これは先生いじめでも何でもありません。普通の先生にこんなことは起きません。普通の先生に、あなた個人の責任問われますよって言うようなこと、多分、普通の先生、やりません。生徒を死に至らしめるような教員っていうのは、多分、日本の中でもごくわずかだと思います。そのわずかな教員にうちの息子、当たってしまった。

これは私たち夫婦がよく話しますが、剣太がここで食い止めてくれたんじゃないかと。自分の体を、自分の命を懸けて警鐘を鳴らしたんじゃないか。そういう運命を背負ってきた子であれば、自分がいなくなったあと、立ち上がって戦う両親で私たちを選んでくれたんじゃないかって思っています。だから、声上げて頑張らなきゃいけない。全国で皆さんに知ってもらわなきゃならないと思っています。

学校の行事の中に卒業式がありますね。私たち当然、呼ばれるって思っていました。でも、剣太が卒業する時期になっても学校から連絡がありません。それで、私たち、呼ばれていないんですが、卒業式の3日ほど前に校長先生に確認したら、剣太くんは1年半受講していないので卒業が認められませんでしたって言われました。

それは、死んでしまったから学校に行けなくなったわけで、学校に来て、あなた授業受けてないから卒業できませんよと、そういうことを突きつけられました。

私たちは学校に文句を言いに行こうとか、そういうことは全く考えてなくて、ただ、剣太は学校が好き、お友達が好きだったので、そのお友達と一緒に卒業をさせて

あげたかった。でなければ、何かずっとまだあそこの道場にいる気がしたんですよ。卒業、とにかくさせてあげたかった。

でも、私たちが言っても認められませんでした。そして、東京の私たちを支援してくれる教授なんかにお話して、そちらからお話があり、卒業式の前日に、クラスもないので一番後ろにお父さんとお母さんの席を二つ用意していますと、そちらへどうぞと言われました。

全然心も何もあったもんじゃない。それでも私たちは行きました。剣太をみんなと卒業させてあげたかったからです。

そうすると、剣太が入れば180名の卒業生なんですけど、校長は剣太の名前すら呼んでくれなくて、以上、卒業、授与される者、179名と言いました。私は主人に、もう帰ろうって言いました。あの中に剣太が入ってない。そのときに、1人の、剣太が保育園のときから一緒のお母さんが、式の途中、すみませんって手を挙げました、

しーんとした体育館の中で。そして、そのお母さん、立ち上がって、今日は工藤剣太くんのお父さんがお母さんもみえています。卒業生として工藤剣太くんの名前、呼んでいただけませんか。賛同される方、拍手をもって言ったときに、皆さん、拍手してくれました。

そして、校長は言いませんでしたが、当時の学年主任が、ステージではなく保護者の前に立って、卒業を授与される者、工藤剣太。名前を言ってくれました。私は席に座っていましたが、はい、立ち上がりました。そして、皆さんに、ありがとうございますって頭を下げました。

後から聞いたんですけど、そのときに同じ中学から同じ高校にいった子どもたちが、全員泣いていたって言いました。やっぱりみんな、剣太と卒業したかったんだと思います。

そのあと、竹田市長と大分県議さんが御挨拶される中で、今日卒業される180名の皆さんって言ってくれました。剣太が入ってるって。2人ともそう言ってくれました。

そして、卒業生代表の女の子が、私たちは工藤剣太くんの死を受け入れることができません。私たちは剣太くんを含む180名で卒業しますって言いました。私も主人も、その言葉で、もう満足でした。あ、この子たちと一緒に卒業ができるって思いました。

心なんです。校長たちは私たちに言いました。卒業証書は剣太くんのは正式なものではありません。番号が入っていませんから。私たち、そんな、いらないんです、番号なんか。鉛筆書きでいいんです。卒業証書、工藤剣太。鉛筆書きでもいい。立派な卒業証書なんか要らないんです。同級生と一緒に卒業証書って授与してほしかっただけなんです。

式が終わって帰りしな、主人には教頭が、私には野球部の顧問のちょっとがっかりした先生が、それぞれがそれぞれについて校長室へどうぞって。何ですかって言ったら、校長室で剣太くん個人の卒業式をやりますって。そこには報道も呼んでました。

アピールですよ。学校のアピール。私たちは行きませんって言って。そんなの要りません。行きませんでした。

この卒業式には、まだ裏のお話がありまして、剣太の一つ年下にいとこがいます。アスカちゃんっていう女の子がいます。この子がブラスバンドで卒業式の、卒業生が入場するとき、ずっと音楽を流すんですけども、うちの息子、剣太が亡くなったあとに次男も学校に行けなくなりました。

で、転校したんですね。その竹田高校を転校しました。なぜかっていうと、みんなが笑ってる。普通のことです。学校で笑ってる、騒いでる。先生が普通に授業してる。生徒たちと笑ってる。それが許せなかった。この前、兄貴があそこで死んだのに、何でみんな笑ってるん？何でみんな普通に生活してんのかっていうのが彼には許せなかった。学校に行けなくなりました。

そして、いろんな方の配慮もあり、別の学校へ転校しました。しかし、そこにもう1人、いとこのアスカちゃんっていう女の子が通ってました。アスカちゃんは剣太ときょうだいのように、剣太はいとこの中で一番年なので、みんな兄のように慕っていた子なので。

学校に1年生のときに行けば、ケンくんが声かけてくれると。廊下の向こうからでもアスカって声かけてくれる。困ったことがあったらケンくんがいるっていつも思ってた。

その剣太が学校で亡くなった。弟の風音はいなくなりました。その学校で唯一、今度はその子が1人で戦いを始めました、うちの剣太のために。

剣太が亡くなった次の年、8月22日はまだ夏休み期間中なんですけど、8月22日、何か登校日で学校に行くらしいんですけども、そのときに黙祷すらないと。そのとき、アスカちゃんは教頭のところへ行っって、今日は何の日か知ってますか。剣太がここで亡くなった日です。皆さん、黙祷してください。高校2年生。そして、それを教頭が校長に耳打ちしに行っって黙祷する。

副顧問というのがアスカちゃんの担任だったかな。事件が起きてからすぐに教壇に立ちました、副顧問は。アスカちゃんは教室に入って座ったときに、その副顧問が前に、教壇に立ってる。アスカちゃんは目の前に行っって、剣太くんがなくなったのに、何で先生がそこに立ってる？と。あなたがそこで授業するんであれば、私が出ていく。そのままかばんを持って学校から帰る。

すごく成績いい子でしたが、それから徐々に成績落ちていきました。学校にもなかなか通えなくなったり、学校信じれない、先生を信じれない。すごく荒れていました。でも、彼女は卒業するまで剣太のために学校と戦いました。卒業式のときも、彼女は1人で校長に直談判しに行こうとしました。何でおじちゃんとおばちゃんが呼ばれない？すると、担任と副担任が、これは先生たちが校長に言いに行くから、あんたは先生に言いに行かなくていいと。先生たちに任せなさいって。で、アスカはお願いしますと言った。

そして当日、私たちは出席はできましたが、剣太の名前が呼ばれなかった。それに対してアスカちゃんは泣き出してしまいました、ブラスバンドのところですね。そして、ブラスバンドの顧問が、アスカ、どうした？って来ました。アスカはケンくんの名前が呼ばれなかったって泣いていました。

その顧問はどうしたか。アスカちゃんの目の前に土下座をして、こんな校長を持った先生たちが悪い。アスカ、ごめんなって謝ったそうです。その後すぐ、その先生は別の学校にいきました。そして、次の朝、卒業式の次の日ですが、校長が校門の前で生徒たちにおはようって声をかける。よくありますね。おはよう。おはようございまーすって。

アスカちゃん、どうしたかっていうと、校長の目の前に立ちました。そして一言。恥を知れって言いました。高校生が校長に向かって。それは剣太への、どうしてケンくんをこんな扱いしたっていう、彼女の中のすごい葛藤があったんですね。

そして、そのことで、姉の子なんですけど、私の姉は学校に呼び出されました。校長に暴言を吐いたと。そして、注意を受けました。

そんなふうに、アスカちゃんは剣太のことでずっと3年間、戦いながら、おかしいと思ったら自分で声を上げて先生たちにちゃんと意見しに行き、そして自分の卒業を迎えましたが、その日の朝、主人がアスカちゃんに電話をしました。

アスカって。ありがとなって。剣太のことでおまえは本当につらい思いをしたなって。ありがとな。そしたら、アスカは泣いていたそうです。姉の話では、あんなくそ学校行くかと。卒業式なんか出るもんかって本人言ってたそうです、その日の朝。

で、有言実行する子なので、姉はこれで卒業式行って暴れられたら大変だと思ったので、無理強いしなかったんですね、着替えてなかったけど無理強いしなかった。で、もう行かないもんだって思った。

そこへ主人が、アスカありがとなって。おまえ一番つらかったな。剣太のためにありがとなって電話をし、彼

女は泣いて、それからぶわって着替えたそうです。そのまま、姉もびっくりしてましたけど、卒業式行くの？って言ったら、当たり前やって言って。

そして、急いで姉も学校に車で連れていったら、もう卒業生、並んでいて、その間にすっと入って、卒業式、無事に終わったそうです。

一人の子が亡くなったっていても、周りの、その子を大切に思ってる人たち、お友達、すごいダメージを受けます。これも私たち、本当に見てきました。もう嫌ってうほど見てきました。

中学校もすごく人数が少ない中学校だったんですけど、剣太のお葬式の出棺のときに、ちっちゃい街なんですけど、道路挟んで、参列というか、葬式も1000人っていう人が集まりました。学校からはバスが出ました。

すごい人数。入りきれないほどのちっちゃい街なんです、出棺のときに、私は剣太の写真持って乗ってたんですけど、道の向こうの歩道に同級生が、中学3年生のときにそろえたTシャツがあったんです。

川田龍平さんと呼ばうっていうプロジェクトがあったときに、みんなでそろえたTシャツがあったんですけど、それをみんな着て。そして、歩道に1列にばあーと子どもたちが並んで、剣太ーっていうすごい声がしました。みんながみんな、剣太ー、剣太ーって呼んで。

そして送り出されて火葬場に行ったんですけども、大体2時間ぐらいかけて骨になってちっちゃくなった剣太抱えて家のほうに戻っていると、マイクロバスで戻ってたんですけど、うちの家の近くにちょっとした広場がありまして、そこにその子たちが全員集まってる。

そこ、通過するとき、あらって思ったら、その子たちが全員。そこにマイクロバス止めてもらって、私たち、剣太の遺骨と写真持って降りました。

そしたら、みんなが温かく迎えてくれたんですね。剣太、お帰りーって。そのときの子どもたちはみんな笑顔でした。多分、決めてたんですね。みんな笑顔で剣太迎えるぞってというのは決めてたんだと思う。

剣太ともう1人、ユウヤっていう親友がいました。2人ね。この2人がクラスをまとめていました。何かあると、この2人がリーダーになってやっていた。そのユウヤがみんなを集めて、いいか、剣太いなくなったけど、みんな大丈夫だから、俺がいるからって。

そうやって剣太がいなくなった、みんな、でも、壊れちゃだめだよって。剣太に恥じんように生きてくぞって。

そのとき、あとからいただいた剣太への手紙、300人ぶんかな、集めてくれて読んだんですけど、剣太、先ほど見ていただいたように救急救命士を目指していましたね。

そしたら、1人の子が書いてくれた手紙に、俺は消

防士になる。そして、救命士の資格まで取るぞって。そして、おまえが生きていたら助けるはずだった人を俺がみんな助けてやるからな。そんな手紙がきました。

もう私も主人もぼろぼろ泣いて、おまえが助けるはずだった人を俺が助けるから、そっちで安心して見てろっていうことですよ。その子は今、消防士やっています。きっと救命士も取るんだと思います。

こういうことが、本当にごくわずかな話なんです。この今話しただけの話って、ほんの一部です。もっともっとたくさんのが起きていて、息子が亡くなったあと、いろんな方との出会いもあって、つながって、そして、こうしてお話を皆さんにできるようになってきました。

だんだん人間らしくなってきました。最初に言っていたみたいに、鬼が住んでいて、最初の頃はわめき散らすだけ。学校関係者が来ても、帰れーとか（笑）。剣太に手を合わせるなどか（笑）。

すごい状態、荒れていましたが、だんだん、そうではない。自分たちがやっていることは自分たちだけのためではない。今となっては、勝手にですけど、全国の子どもたちの命を背負ったつもりで頑張っています。

言うのは勝手ですからね。そんな気持ちで主人と今、おなじ方向を向いて一緒におなじ歩幅で。

最近、なかなか2人で活動することができなくて、うち、ウシ飼ってるんですよ。畜産農家なんです。今朝も4時起きでウシの世話をしてきました、（笑）。なので、なかなか2人で出るってことが難しく、今日は息子がやってくれてるので、行ってこいってということで2人で来ましたけれども、こうして2人で伝えるってこともなかなかなくて、とても（？）皆さんに聞いていただくうえでいい機会だったなって思いますし、私も久しぶりに主人の話聞いて、すごく当時の気持ちに戻ったんですが。

本当、だんだん人間らしくなってきた。人間らしくなってくると何が起きるのかという、普通に悲しみが押し寄せてくる。今までになかった悲しみ。剣太に似たような声で、お母さーんっていう声が聞こえただけで動けなくなる。剣太に似た子がいたら、涙が止まらなくなる。気づかないうちにその子についていってるとか（笑）、いろんな症状になるんですね。

もうこんな時間ですね。で、8月に入ると命日病にかかるんですよ。よく子どもを亡くしたお母さん方にあるんです。

その月になると悲しくて苦しくて、ちょっと精神的におかしくなってくるっていう状態になって、3年前ですかね、パニックになって、8月22日、命日の日に、剣太が学校に行く時間に、もういないのに、このまま学校に

行かしたら剣太が死んでしまうっていうパニックになって、車の中で声上げて泣いて、どうしよう、剣太を学校に行かせんためにはどうしようって本当にまじめに考えるんですね。そして泣き叫んでしまう。

それ、亡くなった時間になったらやっ普通自分に戻れる、今ぐらいに苦しんで、今、倒れてるっていう時間をわかってるんで、たどってしまうんですよ。あるときは、もしかしたら空港に行ったら帰ってるかもしれないとか、みんな大学から息子が戻ってくるのよねとか普通に話すので、もう帰ってきたら大変、いろいろ作んなきゃいけないって、帰ってくるのよっていうのを聞きます。

そりゃおいしいもん作ってあげないとねって普通に返してるんだけど、お買い物の途中、カブを握りしめて、だんだん体が震えてくる、自分でも想像できないパニックになるんですね。

それを、そのときに、あ、もしかしたら空港に行ったらあの子、荷物抱えて待ってるかもしれない、空港に行ったらいいのかな、あ、駅に迎えに行ったらいいのかなって、本当にまじめに考えていて、車を発進させようとする、そういうことも起きます。

子ども亡くした親って本当、心療内科に常にかかっていないといけないような状態なんです。年数いったら元に戻るわけでもなく、ただそういうパニックが起こる回数が少なくなってくるだけで、だから、何度も言いますが、こんな状態にならないように、私たちがもうこれ以上傷つくことはないの、子どもの死以上に傷つくことは多分ないです。

主人が一度言ってくれました。もう俺たちの盾はぼろぼろだって、本当に戦い続けてきました、この8年。

いろんなひどい言葉も浴びてきましたし、裁判というのは、一回一回の裁判がこっちも真剣勝負ですけども、向こうからの攻撃もすごいです。それを2人でいつも自分たちの盾をこうやって、頑張ってきました。

主人が、もう俺たちの盾はぼろぼろだって。けどな、二つ合わせたらまだ戦えるぞって。そのとおりやと思います。私たちが先頭に立ってないと守れないんですよ。

なぜなら私たちが敗北してしまったら、次に私たちのように戦う人っていうのは子どもを亡くしたところがスタートなんですよ。

子ども亡くしたところから立ち上がって戦うまでっていうのは、私たちはどれだけ苦しいか知ってます。だからこそ、ここまで戦ってきた自分たちにしかできないことっていうのはあるんです。

他の人をこんな目に遭わせたくない。子どもが亡くなって立ち上がれるはずがない。だから、このぼろぼろの盾で私たちはまだまだどれだけでもいろんな、ありとあ

らゆることをやってっても、これから先の命を守っていかうって思っています。

質疑応答の時間がちょっと食い込んでしまったんですけれども、すいません、御清聴ありがとうございました。

注

- 1) 肩書はいずれも事件当時のものである。
- 2) 国家賠償法第1条第1項「国又は公共団体の公権力の行使に当る公務員が、その職務を行うについて、故意又は過失によつて違法に他人に損害を加えたときは、国又は公共団体が、これを賠償する責に任ずる」。
- 3) 大分地方裁判所判決平成25年3月21日(事件番号平成22年(ワ)222号)参照。
- 4) 国家賠償法第1条第2項「前項の場合において、公務員に故意又は重大な過失があつたときは、国又は公共団体は、その公務員に対して求償権を有する」。
- 5) 大分地方裁判所判決平成28年12月22日(事件番号平成27年(行ウ)第6号)。
- 6) 福岡高等裁判所判決平成29年10月2日(事件番号平成29年(行コ)第6号, 同第24号)。